

エンパワーメント理論を用いた実践活動 および研究の動向と課題

下山田鮎美、吉武清實¹⁾、三島一郎²⁾、上埜高志¹⁾

宮城大学看護学部

キーワード

エンパワーメント、コミュニティ、実践活動
empowerment, community, practical activities

要 旨

本研究では、エンパワーメントに関する理論、それを活用した実践活動および研究の動向について概観した。その結果、エンパワーメント概念は多くの領域においてキー概念とみなされるようになってきていること、基盤を形成する価値観が存在すること、そして「プロセス」および「アウトカム」の双方を示し、いくつかのレベルを横断して用いられるという特徴があること、が改めて浮き彫りになった。

また、近年はエンパワーメントを志向した実践活動の報告も多数見られるようになっており、今後はそれらの実践活動において獲得された知見を集積、統合することにより、さらなる理論の精緻化および実践活動への貢献が求められることを示唆した。

Empowerment Theory-Practical Applications and Research Trends

Ayumi Shimoyamada, Kiyomi Yoshitake, Ichiro Mishima, Takashi Ueno

Miyagi University School of Nursing

Abstract

Practical activities based on empowerment theory, as well as research trends, were surveyed. The results showed that empowerment theory is being applied in many areas, is valuable as a foundation for many processes, is applicable to both process and outcome, and has the special characteristic of crossing multi-level boundaries.

Also, numerous reports concerning practical activities aimed at empowerment have appeared recently. This suggests that the accumulation of knowledge in these activities would be useful in refining both practical activities based on empowerment and the theory itself.

1) 東北大学大学院教育学研究科

2) 大東文化大学文学部

I. はじめに

近年、人間の健康には疾病の直接的原因ばかりではなく、社会的・文化的要因も関連しており、それらのひずみが健康問題として具現化されていると考えられるようになった¹⁻³⁾。そのため、それらの問題に対する活動のあり方も社会科学的アプローチを前面に押し出した「総合的な健康政策樹立」という方向へ変化すると共に、健康を基本的人権の一つとして尊重すること、住民を地域で生活する主体と捉え協働していくことが重要視されている¹⁻³⁾。

このような背景のもと、我が国でも、地域保健学や地域看護学、社会福祉学、コミュニティ心理学などのヒューマンサービスに関わる領域において、人々が自分自身の生活をより能動的にコントロールできる可能性を高めるプロセスを意味する、「エンパワーメント」という概念⁶⁾が注目され、人々やコミュニティのエンパワーメントを意図した実践活動が展開され始めている。しかしその反面、この概念は理論的にも発展途上であり、研究の蓄積が必要不可欠であることが指摘されている⁷⁻⁹⁾。

そのため本研究では、コミュニティを基盤とした活動が展開されている前述の4領域に着目し、エンパワーメントに関する理論、実践活動および研究の動向を整理すると共に、今後の課題について考察を行った。

II. エンパワーメントに関する理論

1. エンパワーメント概念の起源および変遷

エンパワーメントという用語が最初に用いられたのは、17世紀であり、「権利や権限を与えること」という意味の法律用語としてであるとされている¹²⁾。そして1960年代と1970年代のアメリカ公民権運動やベトナム反戦運動といった社会運動、あるいは政治的な文脈の中で用いられるようになり^{7, 10, 11, 13)}、さらにこの用語を用いた論文が目立ってくるのは、1980年代^{15, 16)}あるいは1990年代^{7, 16)}に入ってからであることが指摘されている。また日本においては1995年以降になって、この用語を表題に据えた書籍が相次いで出版されたり¹⁷⁻²⁰⁾、雑誌で特集が組まれたり²¹⁻²⁴⁾するようになってきている。

次に、先に述べた4領域においてこの用語が用

いられてきた文脈の変遷について述べる。

はじめに、地域保健学、地域看護学領域では、疾病のリスクファクターとされるパワーlessnessへの注目に伴って提唱されるようになった、「エンパワーメント教育」の中で用いられたのがその起源である²⁵⁻²⁸⁾。そして近年は、諸外国においても、我が国においても、プライマリヘルスケア、ヘルスプロモーション、及びヘルシー・シティーズ・プロジェクトとの関連で頻繁に用いられるようになってきている^{10, 29-35)}。

また、日本におけるエンパワーメント概念の普及にあたっては、地域看護学領域における実践活動の蓄積も関連すると思われる。例えば久常³⁶⁾は、住民による健康学習の展開において、1986年の段階で「主体形成」という用語を用いており、このエンパワーメントに相当する概念が存在していたといえよう。さらに近年、この概念を積極的に用いている麻原⁹⁾が「保健婦活動を一言で表現してくれるような言葉」と称しているように、エンパワーメントは地域看護学領域の専門性、即ち「コミュニティの個人や集団に対してケアを提供しながら、健康問題を生じている人々の共有する環境に働きかけ、必要に応じて制度やシステムを変えながら、コミュニティ自身が主体的に問題解決できるよう援助していく」活動³⁷⁾を示す、一つのキー概念と考えられるようになってきている^{1, 9, 38, 39)}。

このように、これらの領域におけるエンパワーメント概念は、当初健康問題を有する人々すなわち「パワー」の欠如状態に陥りやすい人々を対象とした活動の中で用いられてきたと考えられるが、今日では健康レベルを問わない活動、さらにコミュニティづくりとも関連する活動においても用いられるようになってきているといえよう。

次に、社会福祉学領域におけるエンパワーメント概念の成立にあたっては、ソーシャルワークの萌芽期における社会改善への取り組み、具体的にはAddamsらを中心とするセツルメント運動における思想が大きな影響を与えたと考えられている^{10, 41)}。そしてその後、1960年代から1970年代にかけての「人間-社会環境」の相互作用への着目を経て、1980年代にさらに注目を集めるようになったことが指摘されている⁴⁰⁾。またこのような背景の中で、エンパ

ワーメント実践理論の展開における先駆的役割を果たしたと考えられているのが、1976年にSolomon¹²⁾が出版した「Black empowerment: Social work in Oppressed Communities」という著書であり、これがエンパワーメント概念の起源として位置づけられることも多い^{15, 41)}。そして今日では、このような背景を踏まえ、女性、貧困層、障害者等に対応する「エンパワーメント・アプローチ」として整理され、ソーシャルワークの基本的枠組みとして用いられるようになってきている¹⁶⁾。

このように、この領域におけるエンパワーメント概念は、当初から差別や抑圧により「パワー」の欠如状態に追い込まれがちな人々を対象としたソーシャルワーク実践の中で用いられており、その後の発展を経てキー概念の一つとして位置づけられるようになったといえる。

最後に、コミュニティ心理学領域においては、Rappaport⁶⁾の「In Praise of Paradox: A social Policy of Empowerment Over Prevention」がエンパワーメント概念の起源とされている⁴³⁾。そして以後、セルフヘルプグループや相互支援 (mutual aid) といった当事者運動と密接な関わりを持ちながら、当事者と専門職の関係性を重要視しつつ、この領域における理論的支柱として論じられてきたとされている⁴⁴⁾。そして特に近年は、地域精神保健活動をはじめとする社会運動とエンパワーメントの関連も論じられるなど⁴⁵⁾、以前にも増してコミュニティを意識した活動が展開されていることが推測される。

以上4領域について概観したが、これらのことから、この概念は今日に至るまで各領域の文脈で用いられてきたこと、そして近年になって共通してキー概念に据えられるようになったことが示唆されよう。しかし、この用語の普及に伴い、日常的に幅広い文脈で用いられることも増え、それによって、理論的明快さを欠くという指摘、あるいはその意味内容を疑問視し、使用を控えるようにという主張が見受けられるなど、いくつかの弊害も示唆されるようになってきている^{25, 26)}。そのため、この概念が本来有している価値観や考え方の再認識が必要と考える。

2. 基盤となる価値観・考え方

この概念の基盤となる価値観について、久木田¹²⁾は、「すべての人間の潜在能力を信じ、その潜在能力の発揮を可能にするような人間尊重の平等で公正な社会の実現」と述べているが、ここに含まれているような潜在能力、能動性、強さ (strength) など人間の肯定的な側面への着目^{7, 16, 47)}が、まず特徴の一つとして挙げられる。また、Zimmerman⁴⁸⁾が「多くの社会問題は、資源の不公平な分配やアクセスにより存在する」と述べているように、社会政治的な文脈において問題を捉えるという点も特徴といえよう。

また、これらの実現に向けた専門職と対象者の関係性については、Duffyら⁴⁹⁾による、「様々な関わりの中で対象者自身がエンパワーされ、そのことによって独力で何かができるようになる」という指摘が基盤をなすと思われる。そして、専門家を「協力者 (collaborator)」や「促進者 (facilitator)」等のコミュニティの資源として捉えるという、対象と専門家の役割関係の再定義⁴⁹⁾、また「empowering profession」として示されている「側面的援助者」、「社会制度における改革と変化を促進する役割」という方向性¹⁵⁾は、エンパワーメントを志向した実践活動においても重視すべき点であろう。

3. エンパワーメントの概念とその特徴

まず、エンパワーメントの代表的な定義^{6, 40, 50-53)}を表1に示す。そしてこれらを概観したところ、どの定義にも共通して「プロセス」を意味する用語が用いられており、この概念の特徴の一つであるといえる。このことは、多くの研究者により指摘されており^{10, 21)}、また具体的なプロセスも提示されている。例えば、麻原⁹⁾は、個人のエンパワーメントプロセスとして、①個人の持つ潜在能力、一貫性への希求、②自身の客体視、③新しい価値観の獲得、④問題解決の方法の習得と実践、問題解決能力の獲得、の4段階を示しており、実際にはこのように単純なプロセスではなく、他者との相互作用において行きつ戻りつしながら複雑に経過していくという見解を述べている。そして、そのプロセスを漸進するものとして、集団の力の存在を挙げている。また清水¹⁰⁾は、①グループへの参加、②グループ内での対話・問題に対する批判的

表1 代表的なエンパワーメントの定義

定義者	定義
Solomon (1976)	スティグマ化されている集団の構成メンバーであることに基づいて加えられた否定的な評価によって引き起こされたパワーの欠如状態を減らすことを目指して、クライアントもしくはクライアント・システムに対応する一連の活動にたずさわる過程
Rappaport (1981)	個人、組織、コミュニティが自分自身の生活を統御できるその過程であり、メカニズムのこと
Wallerstein (1988)	コミュニティやより広い社会において、自分たちの生活を掌握していくことへの、人々や組織やコミュニティの参加を促進していくソーシャル・アクションの過程
Zimmermanら (1988)	個人が自分自身の生活全般にわたってコントロールと支配を獲得するのみならず、コミュニティへの民主的な参加にも同様にコントロールと支配を獲得する一つのプロセス
Gutiérrez (1990)	個人がそれぞれの生活状況を改善するための行動を起こすことができるよう、個人的、対人的、政治的なパワーを強めていく過程
Segalら (1995)	パワーレスな人たちが自分たちの生活への統御感を獲得し、自分たちが生活する範囲内での組織的、社会的構造に影響を与える過程

検討、③問題意識と仲間意識の高揚、④行動、の4段階を挙げており、こうした行動やその成果が新たな参加やより熱心な参加を促すことで、新たなエンパワーメントの過程が始まっていくとしている。さらに、Gutiérrez⁵²⁾は、順序性や重要性の優劣は想定していないものの、①集団的な体験を通しての正当化、②批判的思考と活動のための知識と技術の獲得、③内省的な活動、を挙げている。

また、この「プロセス」を意味するという特徴と関連し、「プロセス」と「アウトカム」の双方を内包しているという指摘も見受けられる。特にZimmerman⁴⁸⁾は、この両者を区別して論じることの重要性を示唆し、またその一例として表2を示している。

さらに、これらの定義には、個人、組織、コミュニティや社会など、複数のレベルが含まれていた。野嶋²⁴⁾は、このような特徴に注目したHawks⁵⁵⁾の論文を援用し、個人・対人関係・集団・組織・社会などを、また、Gutiérrez⁵²⁾は、個人的（個人的な事柄を解決したり影響を与える能力に関する感情や認知）、対人関係的（問題の解決を促す他者との経験）、環境的（セルフヘルプの努力を促進したり妨害する社会的制度）の3つのレベルを挙げている。さらに、清水¹⁰⁾は、個人（一個人が個々の生活に対して意思決定をし、統御できるようになる、またはできていると感ぜられるようになること）、組織（組織の中で個人が意思決定の役割を

担うことで自らの統御感を高めたり、組織がコミュニティレベルでの決定や資源の再分配に影響力を及ぼすことができるようになること）、コミュニティ（コミュニティが個人なりグループが必要に応じて行っている努力に対して、社会的・政治的・経済的な資源をより大きな社会から獲得してきたり、そうした資源をより使いやすい形にして提供していくことになること）の3段階を示しており、他の多くの研究者も同様の段階を示している^{48, 51, 55)}。これらのことから、このようなレベルの多様性もこの概念の特徴であるといえよう。また実践活動や研究においては、これらそれぞれのレベルについて理解していくこと⁴⁸⁾、焦点を当てるユニットを明確化すること²⁴⁾などが必要と考えられており、留意すべき点であると思われる。

しかしその一方で、このような各レベルは相互作用を有していること^{10, 30, 51)}、あるいは連続体であること⁵²⁾、さらにはエンパワーされている個人の総計が組織やコミュニティのエンパワーメントということではないということ⁴⁸⁾も指摘されている。そのため、活動や研究においては、これら各レベルの関係性を念頭におくことがさらに重要であり、最終的にはこれらを統合した理論の形成も求められていくと考える。

表2 エンパワーのプロセスとエンパワーのアウトカムの比較

分析の水準	プロセス (力をひき出す)	アウトカム (力をひきだされる)
個人	意思決定スキルを学習 資質・資源を管理する 他者と活動する	統制の感覚 批判的な認識 参加の行動
組織	意思決定に参加する機会 責任が共有される リーダーシップが共有される	資質・資源を求めての効果的競い合い 他の組織とのネットワーク形成 政策への影響
コミュニティ	資質・資源へのアクセス 開かれた統治の構造 多様性の許容 (耐性)	組織の連合 多文化共生社会のリーダーシップ 住民の参加のスキル

※文献48)より引用

Ⅲ. エンパワメントに関する理論を用いた実践活動および研究の動向

先にも述べたように、エンパワメント概念は文脈に依拠した複数のレベル、プロセスおよびアウトカムを内包している。そのため、すべての実践活動に適合するモデルの提示にも困難さが伴う。しかし、実践活動を分析することにより見出された、活用可能な示唆は、先に述べた4領域でも見受けられてきている。そこで、本項では、エンパワメント理論を活用した実践活動に関する研究のうち、言及されることが少ないものの、今後展開される実践活動が増加し、理論的整理が特に必要と思われる、コミュニティレベルに焦点を当てたものについて概観していく。

まずこのレベルに焦点を当てた実践報告の傾向であるが、施策形成や地域組織活動 (community organization) への関与過程について言及したものが多く、また用いられている手法としては、参加型アクションリサーチ (participatory action research) やエスノグラフィー (ethnography) などのコミュニティに基盤を置いた調査 (community-based research) が頻繁に見受けられた^{8, 33-35, 56-63)}。これらの調査では、外部の研究者とコミュニティ内部の住民との共同の実践が重視され、共通知識 (common knowledge) やローカルな知識 (local knowledge) の創造、社会変革を起こすためのソーシャルアクションの生成、及び関与者やコミュニティのエンパワメント等がその成果として挙げられている^{8, 33, 35, 56-58)}。

そこで、次にそのような実践活動の例、及びそ

れらに関する研究から得られた知見について、代表的なもの^{33, 57, 63)}を表3に示す。なおこれらの論文は、実践活動の概要と理論的示唆の双方が含まれていることという視点で選択した恣意的なものであるため、すべての実践活動およびそれらに関する研究の傾向を反映したものとはいえない。しかし、特に研究の傾向について述べるならば、その大多数が、ある一定の枠組みに沿った展開過程についての記述という段階に留まっていることが推測される。

またこの点と関連して、Fynn³⁹⁾はコミュニティエンパワメントの評価と測定に関する課題に言及し、①実践活動における関与者の認知についての情報を得ること、②実践活動そのもののアクションをみること、の2つのアプローチの必要性を示唆している。特に①については、言及している研究も数少ないことが予測されるため、今後の研究における課題と考える。

Ⅳ. おわりに

本研究では、エンパワメント理論、それを活用した実践活動および研究の動向について概観した。その結果、エンパワメント概念は、多くの領域においてキー概念とみなされるようになってきていること、基盤とすべき価値観が存在すること、この概念は「プロセス」と「アウトカム」双方の意味を内包し、いくつかのレベルを横断して用いられるという特徴があること、が改めて浮き彫りになった。

また、近年はエンパワメントを志向した実践

活動の報告も多数見られるようになっており、今後はそれらの実践活動において獲得された知見を

集積、統合することにより、さらなる理論の精緻化、及び実践活動への貢献が求められるであろう。

表3 コミュニティレベルのエンパワーメントを志向した実践活動に関する研究

フィールド	実践活動の概要	研究目的及び結果の概要
アメリカ合衆国 インディアナ州 ³⁵⁾	<ul style="list-style-type: none"> ●名称：Healthy Cities Indiana、「CITYNET Healthy Cities」うち2事例 ●内容：健康に関するコミュニティの問題解決を意図したプロジェクト ●手法：アクションリサーチ(action research) ※参加者は、多様な領域における地域の代表者と地方政府の職員（それぞれのプロジェクトにより異なる）。 	<ul style="list-style-type: none"> ●研究目的：エンパワーメントに導いているアクションリサーチの結果の分析枠組みをCITYNET HC Projectの2事例に適用し、その具体例を提示すること ●結果の概要： <ol style="list-style-type: none"> 1. コミュニティエンパワーメントとアクションリサーチの関連を証明する概念（文献検討による）：以下の点が見出された。 <ol style="list-style-type: none"> ①コミュニティについての焦点、②市民参加、③情報と問題解決、④パワーの共有：公平と社会的な公正、⑤生活の質 2. これらの概念に沿って、各事例の展開過程が記述されていた。
アメリカ合衆国 ミシガン州 ³⁶⁾	<ul style="list-style-type: none"> ●名称：特になし ●内容：ホームレスを取り巻く社会問題の解決を意図した組合を創造 ●手法：参加型リサーチ(participatory research) ※参加者は、ホームレス、かつてホームレスであった人。外部の研究者はアドバイザーとして参加。 	<ul style="list-style-type: none"> ●研究目的：活動への参加者のエンパワーメント（アウトカム）、及びPR介入自体をモニターすることにより、介入の成果を調査すること ●結果の概要： <ol style="list-style-type: none"> 1. エンパワーメントの構成要素である、自尊心、自己効力感、政治的有効性感覚、批判的な認識、コミュニティ感覚/結合の感覚、ソーシャルアクション、ソーシャルアクション技術のいくつかについて、標準グループより介入グループの法がより高いスコアを示していたことが見出された。 2. PR介入の構成要素：①研究、②教育、③ソーシャルアクションを枠組みとし、その展開過程が記述されていた。
カナダ ブリティッシュ コロンビア州 ³⁷⁾	<ul style="list-style-type: none"> ●名称：Health Canada's Seniors Independence Program「The STEPS Project」 ●内容：高齢者や障害者の転倒を予防する環境づくりを意図したプロジェクト ●手法：参加型アクションリサーチ (participatory action research) ※参加者は種々の地域団体を代表する高齢者や障害者、政府機関の職員、外部の研究者。 	<ul style="list-style-type: none"> ●研究目的：参加型アクションリサーチにコミュニティを巻き込むための方略を明確化すること ●結果の概要：以下の点が見出された。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 活動の成功要因：コミュニティの完全な参加とインボルブメント 2. コミュニティインボルブメントの重要な要素： <ol style="list-style-type: none"> ①参加に対する計画を立てる、②コミュニティインボルブメントの構造的な構成要素（運営委員会を発展させる、運営委員会でのミーティングを促進する、コミュニティを巻き込む、タイミング、プロジェクトを終える）、③PARの哲学を生かす（コミュニティを引きつける、研究一致を促進する、パートナーシップを促進する）④コミュニティのための研究の信頼性を高める、⑤必要とされるリーダーシップのタイプ
日本 島根県出雲市 ³⁸⁾	<ul style="list-style-type: none"> ●名称：出雲健康文化都市プロジェクト ●内容：市民参加によるヘルスケア政策の確立 ●手法：「参加型行動研究」(participatory action research) ※参加者は、住民、行政職員、外部の研究者など 	<ul style="list-style-type: none"> ●研究目的：市民参加型ヘルスケア政策の確立と実施プロセスにおける、「参加型行動研究」手法の成果と課題を検討すること ●結果の概要：以下の点が記述されていた。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 市民参加型ヘルスケア政策の内容及び確立過程 2. 市民参加型ヘルスケア政策確立・実行過程において関与者の担った役割、「参加型行動研究」において用いた手法 3. 「参加型行動研究」の課題は、①市民参加型研究機関の政策提言能力と学習機能の強化、②政策の意思決定過程への市民参加の強化、評価についての情報公開、③財源と権限の問題

【引用・参考文献】

- 1) 村嶋幸代：地域看護の視点，地域看護学－実践の理論化をめざして－(金川克子監修)，日本看護協会出版会，pp. 27-40，1997.
- 2) 中村裕美子，井伊久美子，標美奈子(編)：住民の主體的組織活動の展開－地域保健活動のめざすもの－，医学書院，pp. 3-4，1996.
- 3) 岩永俊博：政策づくりにおける計画と目的，健康の政策科学－市町村・保健所活動からの政策づくり－(新井宏朋，丸地信弘，山根洋右，島内節，岩永俊博編集)医学書院，pp. 116-131，1997.
- 4) 成木弘子：ヘルスプロモーション開花の時代，保健婦雑誌，55(11)，913-917，1999.
- 5) 平野かよ子：公衆衛生活動の専門家としての保健婦の未来，保健婦雑誌，55(11)，901-906，1999.
- 6) Rappaport：In Praise of Paradox: A social Policy of Empowerment Over Prevention, *American Journal of Community Psychology*, 9(1), 1-25, 1981.
- 7) 野嶋佐由美：エンパワーメントに関する研究の動向と課題，看護研究，29(6)，453-464，1996.
- 8) 山根洋右：参加型行動研究，前掲書 3)，pp. 106-115.
- 9) 麻原きよみ：エンパワーメントと保健婦活動－エンパワーメント概念を用いて保健婦活動を読み解く－，保健婦雑誌，56(13)，1120-1126，2000.
- 10) 清水準一：ヘルスプロモーションにおけるエンパワーメントの概念と実践，看護研究，30(6)，453-458，1997.
- 11) 植村勝彦：コミュニティ心理学におけるエンパワーメント研究の動向－はじめに－企画・司会者の立場から，コミュニティ心理学研究，1(2)，139-140，1997.
- 12) 久木田純：エンパワーメントとは何か，現代のエスプリ376，エンパワーメント－人間尊重社会の新しいパラダイム，10-34，1998.
- 13) Margo Okazawa-Ray：貧困にあるコミュニティ・オブ・カラー(COC)のエンパワーメント－セルフヘルプ・モデル－，*Empowerment in Social Work Practice* (Gutiérrez, Parsons, & Cox), Brooks/Cole Publishing Company, 1998. (ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント－その理論と実際の論考集－(小松源助監訳)，相川書房，pp. 65-82，2000.)
- 14) 清水準一：アメリカ地域保健分野のエンパワーメント理論と実践に込められた意味と期待，日本健康教育学会誌，4(1)，11-18，1997.
- 15) 久保美紀：ソーシャルワーク実践におけるEmpowerment概念の検討－powerとの関連を中心に，ソーシャルワーク研究，21(2)，22，1995.
- 16) 小田兼三：エンパワメントとは何か，エンパワメント実践の理論と技法(小田兼三，杉本俊夫，久田則夫編著)，中央法規出版，pp. 2-17，1999.
- 17) 前掲書13)
- 18) 前掲書16)
- 19) 小川喜道：障害者のエンパワーメント－イギリスの障害者福祉，明石書店，1998.
- 20) Cox, & Parsons：Empowerment-Oriented Social Work Practice with the Elderly, Books/cale Pub.co., 1994. (高齢者エンパワーメントの基礎－ソーシャルワーク実践の発展を目指して(小松源助監訳)，相川書房，1997.)
- 21) コミュニティ心理学におけるエンパワーメント研究の動向，コミュニティ心理学研究，1(2)，139-172，1997
- 22) 前掲書12)
- 23) 麻原きよみ，森田ゆり，Phil Barker，坂本恵，鎌田幸江，津田幸子：特集 エンパワメントに着目した活動を，保健婦雑誌，56(13)，1120-1163，2000.

- 24) 野嶋佐由美, 中山洋子, 近藤潤子: 看護ケアのパラダイムの変換をめぐる一エンパワーメントに関する研究, 看護研究, 29(6), 453-529, 1996.
- 25) Wallerstein & Bernstein: Introduction to Community Empowerment, Participatory Education, and Health, Health Education Quarterly, 21(2), 141-148, 1994.
- 26) Lorraine & Gutiérrez: 序文: 実践にとってのエンパワーメントモデル, 前掲書13), pp. i-iv.
- 27) Wallerstein: Powerlessness, Empowerment, and Health: Implications for Health Promotion Programs, American Journal of Health Promotion, 6(3), 197-205, 1992.
- 28) 吉田亨: 健康とエンパワーメント, 前掲書12), pp. 146-152.
- 29) Eng, Salmon, Mullan: Community empowerment: The critical base for primary health care, Family & Community Health/April, 15(1), 1-12, 1992.
- 30) Hornberger & Cobb: A Rural Vision of a Healthy Community, Public Health Nursing, 15(5), 363-369, 1998.
- 31) Butterfoss, Goodman, & Wandersman: Community Coalitions for Prevention and Health Promotion: Factors Predicting Satisfaction, Participation, and Planning, Health Education Quarterly, 23(1), 65-79, 1996.
- 32) Robertson & Minkler: New Health Promotion Movement: A Critical Examination, Health Education Quarterly, 21(3), 295-261, 1994.
- 33) Flynn, Wiles, & Rider: Empowering Communities: Action Research through Health Cities, Health Education Quarterly, 21(3), 395-405, 1994.
- 34) Rains, Wiles, & Ray: Participatory Action Research for Community Health Promotion, Public Health Nursing, 12(4), 256-261, 1995.
- 35) Ronald, Cynthia, & Sandra: Ethnographic Approach to Community Organization and Health Empowerment, Health Education Quarterly, 21(3), 407-416, 1994.
- 36) 久常節子: 住民自身のリーダーシップ機能-健康問題にいどむ町, 勁草書房, 1987.
- 37) 麻原きよみ: 地域看護学の概念枠組み, 前掲書1), pp. 13-26.
- 38) 門間晶子: コミュニティ心理学におけるエンパワーメント研究の動向-エンパワーメントの測定・評価面から-, コミュニティ心理学研究, 1(2), 152-161, 1997.
- 39) 齋藤泰子: 21世紀の公衆衛生と保健婦-ヘルスプロモーションをめざす看護職-, 保健婦雑誌, 55(11), 929-933, 1999.
- 40) 久保美紀: エンパワーメント, ソーシャルワークを学ぶ人のために(加茂陽編), 世界思想社, pp. 107-135, 1999.
- 41) 渡邊洋一: コミュニティケアの理論と展望, コミュニティケア研究-知的障害をめぐるコミュニティケアからコミュニティ・ソーシャルワークの展望-, 相川書房, pp. 165-195, 2000.
- 42) Solomon: Black empowerment: Social work in Oppressed Communities, Columbia University Press, 1976.
- 43) 山本和郎: 「文脈内存在人間」・「コミュニティ感覚」・「エンパワーメント」, コミュニティ心理学研究, 3(1), 44-46, 1999.
- 44) 三島一郎: コミュニティ心理学におけるエンパワーメント研究の動向-エンパワーメントの理論面から-, コミュニティ心理学研究, 1(2), 141-151, 1997.
- 45) Orford: Empowering the Community, Community Psychology: Theory and Practice, Wiley & Sons, 1992. (コミュニティ心理学-理論と実践(山本和郎監訳), ミネルヴァ書房, pp. 328-360, 1997.

- 46) Gutiérrez, Parsons, & Cox: エンパワーメント志向プログラムにとっての好機を作り出す, 前掲書13), pp. 291-306.
- 47) 山本和郎: 討論 エンパワーメントの概念について, コミュニティ心理学研究, 1(2), 168-169, 1997.
- 48) Zimmerman: Empowerment Theory, Handbook of community psychology (Julian Rappaport & Edward Seidman), Kluwer Academic/ Plenum, 2000.
- 49) Duffy & Wong: Introduction to Community Psychology, Community Psychology, Allyn and Bacon, 1996. (コミュニティ心理学—社会問題への理解と援助 (植村勝彦監訳), pp. 1-36, ナカニシヤ出版.
- 50) Wallerstein & Bernstein: Empowerment education :Freire's ideas adapted to health education, Health Education Quarterly, 15(4), 379-394, 1988.
- 51) Zimmerman & Rappaport: Citizen Participation, Perceived Control, and Psychological Empowerment, American Journal of Community Psychology, 16(5), 725-750, 1998.
- 52) Gutiérrez: Working with women of color: An empowerment perspective, Social Work, 35(2), 149-154, 1990.
- 53) Segal & Temkin: Measuring Empowerment in Client-Run Self-Help Agencies, Community Mental Health Journal, 31(3), 215-227, 1995.
- 54) Hawks: Empowerment in nursing education: concept analysis and application to philosophy, learning and instruction, Journal of Advanced Nursing, 17(5), 609-618, 1992.
- 55) 平川忠敏: コミュニティ心理学におけるエンパワーメント研究の動向—エンパワーメントの実践面から, コミュニティ心理学研究, 1(2), 161-167, 1997.
- 56) Yeich & Levine: Participatory Research's Contribution to a Conceptualization of Empowerment, Journal of Applied Social Psychology, 22(24), 1894-1908, 1992.
- 57) Lindsey & McGuinness: Significant element of community involvement in participatory action research: evidence from a community project, Journal of Advances Nursing, 28(5), 1106-1114, 1998.
- 58) Lindsey, Shields, & Stajduhar: Creating effective nursing partnerships: relating community development to participatory action research, Journal of Advanced Nursing, 29(5), 1238-1245, 1999.
- 59) Gallagher & Scott: The STEPS Project: Participatory action research to reduce falls in public places among seniors and persons with disabilities, Canadian Journal of public Health, 88(2), 129-133, 1997.
- 60) Wallerstein: Power between evaluator and community :research relationship within New Mexico's healthier communities, Social Science & Medicine, 49(1), 39-53, 1999.
- 61) Greenwood & Levin: Empowerment and Liberation :Southern Participatory Action Research and Contemporary Feminist Analyses, Introduction to Action Research, SEGE Publications, pp. 173-185, 1998.
- 62) 藤内修二, 岩室紳也: 新版 保健計画策定マニュアル—ヘルスプロモーションの実践のために, ライフ・サイエンス・センター, pp. 27-32, 2001.
- 63) 塩飽邦憲, 山根洋右, 福島哲仁, 磯邊顕生, 北條宣政, 高同強, 王春潔: 出雲市におけるヘルスケア政策確立のための参加型行動研究, 日本公衆衛生学会誌, 44(6), 464-473, 1997.